

## さど 「佐渡島の金山」

### 世界遺産登録に至るまでの道のり

令和6年7月27日、世界文化遺産に登録された「佐渡島の金山」。そこに至るまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。

令和7年8月3日に佐渡市内にて行われた本座談会では、登録を支えた学術分野の第一人者、新潟県・佐渡市の行政職員、そして世界遺産登録に人生を重ねてきた新潟県OB・OG職員が一堂に会し、世界遺産登録の舞台裏の苦労と未来への思いを語り合いました。



#### 座談会参加者

「佐渡島の金山」世界文化遺産学術委員会委員長・筑波大学名誉教授 稲葉 信子 氏  
新潟県観光文化スポーツ部文化課世界遺産室長 滝沢 規朗、同世界遺産室専門調査員 尾崎 高宏  
佐渡市観光文化スポーツ部世界遺産課課長補佐 宇佐美 亮、同世界遺産課主事 北見 亜樹  
新潟県OB・OG職員 元世界遺産登録推進室長 北村 亮、元世界遺産登録推進室長 小田 由美子  
(司会：新潟県観光文化スポーツ部文化課世界遺産室政策企画員 渡邊 裕之)

#### 世界遺産登録への第一歩

**司会** まずは、佐渡市世界遺産課の宇佐美さんから、これまでの取組について、特に文化財の国指定についてお話いただきたいと思います。

**宇佐美** 世界遺産の構成資産にするためには、文化財保護法による保護措置が必要でした。そのため、史跡の追加指定10件、重要文化財指定2件の作業に携わらせていただきました。通常、市町村の行政職員は、それだけの数の文化財指定に携わる機会がなかなかないと思うので、私にとっては非常に貴重な経験だったと思います。指定にあたっては所有者の同意が必要です。また、分布調査といって、実際に現地を歩きながら遺構を探したり、遺物を採集したりする作業を延々と行いました。

**司会** 佐渡市の場合は、土地所有者が島外に在住する方が多いという事情もあって、他県にまで伺い、直接お会いして指定の同意をもらうという作業もありましたね。その一方で、指定に伴う調査研究を進めるなかで、新たな発見も多かったのではないかと思います。そのあたりの面白さというのはいかがですか。

**宇佐美** そうですね。これまでの佐渡金銀山の研究は、文献史学の研究成果に拠るところが多く、実際に鉱山遺跡の現地調査にはあまり手が付けられてこなかったという点がありました。そのため、第一発見者というわけではないですが、我々の調査で初めて見つかった遺構ですとか、関連資料を調査する中で、いろいろなことがわかり始めました。普段は見るることができないようなものを見せていただいたと思っています。



佐渡市世界遺産課 宇佐美 亮

#### 地道な作業が拓いた登録への道

**宇佐美** 思い返すと、平成17年から平成20年代前半ぐらいは、ひたすら山で草を刈っていたイメージがありますね(笑)。上相川(かみあいかわ)遺跡も2年位草刈りをしていました。そのおかげでいろんな知見を得ることができたと思います。例えば地元の人でさえ、かつて上相川という鉱山町があったという噂だけしか知らなかったのに、我々の調査で初めて所在が明らかになった時などは、苦労しながらも調査を続けてきて本当に良かったと思いました。

**司会** いつも草刈りや遺跡探索ばかりしていて、役所職員として変な目で見られませんでしたか(笑)?

**宇佐美** 今日はここまで草を刈り、こんなことが分かりました、と職場に事後報告はしていました。平成18年からは教育委員会事務局が両津に移ったこともあり、朝は出勤せずに自宅の佐和田から相川へ毎日遺跡調査に通っていました。ネット環境も未発達で、今考えればゆったりとした時代でした。

**司会** それは充実した毎日でしたね。体力的にはきつかったですでしょうけれど。

**宇佐美** 特に上相川遺跡は篠竹がすごくて、見通しも全然きかないような場所でした。ある時は藪を掻き分けて進んでいたら、一緒に作業していた女性にふいに出くわして、「熊が出た!」と騒がれたこともありました(笑)。

**司会** 宇佐美さんに初めて上相川遺跡を案内していただいた時、江戸時代の絵図を持って歩きましたが、あまりにも当時の地割(家の敷地の区画)がちゃんと残っていて、びっくりした記憶があります。

**宇佐美** 佐渡の場合は歴史資料がたくさん残っているということもあり、上相川だけでなく、鶴子(つるし)銀山の滝間歩(おおたきまぶ)の坑内図についても実際に現地で調査すると、当時の姿が絵図通り残っていることがよく分かります。

**司会** 遺跡の現地に立つことによって、はじめて実感できることが多くあると思います。その点は、まだまだ佐渡金銀山遺跡の面白さが広く知られていないのではないのでしょうか。

**宇佐美** ガイドなしでは道に迷ってしまうところや、危険であるため公開できない場所も多くあります。AR(拡張現実)とかVR(仮想現実)とか、映像の技術が進んできていますので、そういった最新技術も活用しながら、現地の様子をリアルに見てもらえるような取組を少しずつでも増やしていきたいと思っています。

**司会** 続いて県職員OBの北村さんにお伺いします。北村さんは、佐渡市で世界遺産推進課が発足した平成21年に、最初の課長として県から市へ派遣されて以降、昨年まで世界遺産登録業務に従事いただきました。平成25年から令和元年までは県世界遺産登録推進室長として陣頭指揮をとってこられました。



新潟県職員OB  
北村 亮

#### 歩みを支えた関係者の協力

**北村** 世界遺産登録を達成するには、調査研究による価値証明が最重要であることはもちろんですが、推薦実現に向けた国や関係機関への働きかけも必要だと考えていました。平成26年には佐渡金銀山世界遺産登録推進県民会議を設立し、県選出の国会議員や県議、市議の先生方にも参与・顧問として参加していただき、推薦実現への要望活動を本格化させました。毎年5月に県民会議の総会を開催して登録推進を決議し、国に要望するわけです。世界遺産登録は、その時々に必要な活動と、多くの方々のお力をお借りして成し遂げることができたと思っています。

**司会** 北村さんは、もともと埋蔵文化財専門職員として新潟県に入庁され、世界遺産を担当する前は県内各地での発掘調査や報告書作りに従事されました。

**北村** 在職45年のうち前半が埋蔵文化財、残りの15年間で世界遺産登録の推進に携わりましたが、実はそれ以前の平成9年に旧相川町で有志が勉強会を始めた頃にも、県の担当として

関わっていました。それ以来、佐渡金銀山の世界遺産登録への関心はずっと持っていました。平成18年、佐渡市からの要望を受けて、本格的に県が世界遺産登録を進めることになりました。上から「寝ても覚めても風呂に入っても、世界遺産のことを考える職員を1人配置せよ」という指示があり、佐渡金銀山は遺跡が中心だから埋蔵文化財の人間が良いだろうということで、白羽の矢が立ったのが小田さんでした。

**司会** 小田さんは県初の世界遺産担当として平成18年に配属されたわけですが、その頃はどのような雰囲気でしたか？

**小田** 世界遺産担当とは言っても、最初は埋蔵文化財係に間借りする形で机ひとつを置かせてもらいそこで仕事をしました。最初に、長く佐渡金銀山を研究されてこられた佐渡の先生に御挨拶に伺ったところ、なぜ埋蔵文化財（考古学）の専門職員が佐渡金銀山の担当になるのかと訝（いぶかし）げに言われたことを思い出します。当時、鉱山研究と言えば中・近世の文献史学研究者が行うのが当然と見なされていたからです。しかし、その後は色々とお話を伺うこともできました。佐渡で地道に調査研究をされていた方々の中には、鬼籍に入られた人も少なくありません。お元気なうちに世界遺産登録を達成したかったという思いがあります。



新潟県職員OG  
小田 由美子



学術委員会委員長・筑波大学  
名誉教授 稲葉 信子 氏

### 価値の発信に向けて

**稲葉** 私は、佐渡金銀山が世界遺産暫定一覧表への記載決定を受けた平成22年に発足された「佐渡金銀山世界文化遺産学術委員会」のメンバーとして参画したのが本格的なお付き合いの始まりです。しかし、その数年前にも小田さんが私に会いに来られて世界遺産を目指すのだという話を伺っていたので、学術委員会のお話をいただいた時は「いよいよか」と思った記憶があります。初期の学術委員会では、色々な専門の先生方の話を聞きながら、世界遺産の論理に結び付けていくために何を要素として選んでいったら良いかを考えることが中心だったと思います。そして、いざ推薦書を書くという段階から集中して取り組みました。ああしたら良い、こうするべきだ、という委員の意見を調整するため、事務局は大変な御苦勞をされたことと思います。委員会開催の都度、考え方や表現が変わっていききましたからね。価値を見出すためには本当に試行錯誤を重ねました。

令和3年に国の文化審議会から国内推薦候補への選定が諮問され、本格的に推薦書を書き始める段階となり、価値を記載する第1章から第3章は県の尾崎さんと私の二人三脚で担当

しました。ほとんどは尾崎さんが書きあげましたが、第3章の3.1そして3.2の比較研究冒頭部分は私の書下ろしです。ここはOUV（顕著な普遍的価値）の骨格の所なので私が責任を持って仕上げたいと思い、最後の最後まで手直しをしながら作成しました。失敗は許されないと思い、強く責任を感じながら取り組みました。（推薦書は英語が正本なので）英語に翻訳した場合はどう読み取られるかということも考えながら執筆しました。そのように苦勞しながら作成した推薦書でしたが、イコモス現地調査時、内容をよく理解しないまま勝手な意見を言う人がいて、「出直してこい」と正直思いましたね。その場では何も言いませんでしたけれど（笑）。

**尾崎** 最初は小田さんと協業しながら推薦書づくりを始めましたが、何から手を付けてよいのかわからない所から始まり、学術委員の先生方や海外の専門家にお聞きして、やっと作り方が分かってきた頃にも、まだ国内推薦を勝ち取れませんでした。推薦書案の作成作業も最初はコンサルタントのお世話になっていましたが、最終的には自分たちでやろうということになりました。最後に自力でやり遂げることができたのは本当に良かったです。

稲葉先生からよく言われたのは、価値証明と比較分析は両輪なのだということでした。価値を証明するためには、比較分析をして佐渡の「売り」を明らかにする必要がありましたが、それにだいぶ苦勞しました。比較分析を始めた頃は、網羅的にデータを集めて深掘りし、一覧表にして学術委員会にお諮りしていました。しかし、「金山で博士論文を書くわけじゃないんだ



新潟県世界遺産室  
尾崎 高宏

よ」と言われて路頭に迷うような気持ちにもなりました。佐渡の特質を絞り込むことが難しかったのです。ヨーロッパ等では鉱業における機械化が広がる時代に、佐渡では手工業による金銀採掘・加工を継続し、高度な技術を発展させたことに価値がありそうだと見通しを持ちながらも、最後の最後まで悩みました。しかし、ある時、稲葉先生から「(技術の発展段階が)遅れていることに意義があるんだよ」と言われ、目から鱗が落ちたというか、そこに面白さがあるのだと確信するようになりました。

**稲葉** どの時代も重要なので、ある時代の特徴を示すことが重要なのです。ヨーロッパと時代差があっても手工業の時代の最後を記録しているのですから。「遅れている」と考えるのか、「ちょっと前の時代の大事な証拠」と考えるのか、発想の転換が必要でした。



どうゆう わりと  
道遊の割戸(相川金银山)  
©西山芳一

### 佐渡金銀山の価値とは

**司会** 金銀山の一連の技術が機械化されなかったのは、鎖国政策の江戸時代なのだから当たり前だ、と言われることもありましたね。

**稲葉** 鎖国だったが故に手工業による最高水準の鉱山技術が生み出されたわけです。人類の歴史の中で佐渡島は金銀生成の壮大な実験場だったのです。もしも江戸時代に日本が鎖国をせず、ヨーロッパの植民地になっていたと仮定した場合、

ヨーロッパ人たちは自分たちの機械技術で金鉱石を採掘したことでしょう。そのような歴史が展開されていたならば、試行錯誤しながら金銀を生成した先人の努力は記録されることなく忘れ去られたはずで、世界の鉱山との比較研究によってはじめて、機械工業か手工業かは別にして、世界の各鉱山と技術的に遜色ないレベルに佐渡金銀山が達していたことが分かりました。山を掘って金属を取り出すことは、人類が培ってきた様々な技術の集大成であり、その価値が佐渡金銀山にはあるということが分かったのです。

**北村** やっぱり金銀なんですよね。鉄とか石炭は大量に採れるから機械化がより進むけど、金銀は元々量が少ないから割と細かい手作業の延長みたいな技術が生き残りやすかったのかもかもしれませんね。

**司会** 佐渡金銀山の価値は、ヨーロッパとは異なる道を歩んだ鉱山技術のもうひとつの歴史であり、そこに世界的価値があるということですね。

**小田** 最初期に招聘した英国の産業遺産専門家のスチュアート・スミス氏は、世界的に価値が高いのは江戸時代のものだ、とおっしゃっていました。当時は近代以降の遺跡も構成資産に含めて世界遺産登録を目指していました。しかし、近代以降の鉱業産業遺産は「どこにでもある」と言われてしまった。近代以降の遺跡や建造物については、大変な思いをして調査をし、国指定文化財になったのに、構成資産にすることができなかったのは正直残念に思います。ただ、佐渡市の皆さんが頑張ってくれたおかげで価値が掘り起こされましたし、(それがなければ)今のように北沢浮遊選鉱場(きたざわふゆうせんこうば)や大間港(おおまこう)が注目されることもなかったと思います。世界遺産の構成資産にはならなかったけれども、江戸時代から平成まで操業した佐渡金山の歴史的価値を示すものとして、いくつもの遺跡が調査研究され、史跡指定につながったことは良かったと思います。

**北村** 最初からゴールが見えていたら、効率的に調査研究や文化財指定ができたのですが、そんなことは無理でしたね。もう一度、世界遺産登録をやり直すことができるなら、もっと上手く進められると思いますが…(笑)。

**小田** 江戸時代の遺跡ながら、最終的には構成資産から外されてしまったものに鉱山白の石切場跡片辺・鹿野浦（かたべ・かのうら）海岸石切場跡（いしきりばあと）、吹上（ふきあげ）海岸石切場跡があります。調査研究成果のおかげで新たな発見があり、国史跡にも指定されました。でも海岸に突き出した場所に立地しているため調査は大変でしたよね。

**宇佐美** 海から船で近づき調査を行ったり、海岸線の岩場を歩いて遺構を探していたので、密漁していると勘違いされ大変な思いをしました(笑)。

### 保存と活用の両立という課題

**司会** 世界遺産に登録され、佐渡への観光客の数は順調に伸びています。また構成資産については、相川金銀山の一部であり、観光坑道として公開されている宗太夫間歩(そうだゆうまぶ)に多くのお客さんが見学に来ている一方、山間部に位置する鶴子銀山や西三川砂金山の活用が課題となっています。

**稲葉** 二次交通が大きな課題。たとえば私がバスで西三川砂金山へ行こうと思っても、両津港からバスを乗り継ぎ、相当な時間をかけないとたどり着けない。また、資産の最寄りのアクセスポイントに着けたとしても、遺跡までの見学ルートが未整備のため迷子になってしまうような場所もある。安心して遺跡を見学しながら学びを深めることができるガイド体制の整備が必須だと思います。

**滝沢** 世界遺産登録後、県庁内でも観光資源として活用していこうという機運の盛り上がりがあります。一方、構成資産を適切に保存し、継承していくことも我々に課せられた重要な使命です。

また、県・市の文化財専門職員に加えて、民間の保存団体やガイドの皆さんも高齢化しており、世代交代も大きな課題です。資産を未来へ継承していくためには、次の世代を育てていかなければならない。今年（令和7年）8月には「高校生・大学生向けのプロジェクト\*」という新規事業を実施します。若い人たちに構成資産を見て、感じてもらいながら、将来の担い手候補として仲間に加わってもらいたいという思いから立ち上げたものです。多くの観光客に来てもらって地元を活性化しながら学術的に裏付けられた調査研究と保存の取組を並行して進めていくバランスがとても重要だと感じています。

**稲葉** 私は日本遺産に関する仕事もしていますが、日本遺産が目指すのは、文化遺産を観光と上手に結びつけるためのモデルコースづくりなのです。しかし、日本だけではないのでしょうか、どこに行っても行政の中で観光部局と文化財部局の職員間で会話が成立していません。文化財側は観光側を嫌うんですね。一方、観光側は文化財が人を呼び込むためのパーツぐらいにしか考えていない。文化財を守りながら、その価値を多くの人に享受してもらう関係性を本来は目指しているのですが、なかなか上手く行っているところがない。観光と文化財を同じ組織として統合しても良いのですが、それぞれがこれまでと同じ考え方、同じ手法でやっているだけでは何も変わらない。一方が一方を利用するだけのものにしかならない。文化財と観光が両輪で施策を実施するものでないといけない。

**北村** 近年、県も市も組織改編により「観光文化スポーツ部」が新設され、観光と文化財が同じ部局に統合されましたが、文化財の専門職員が観光関連事業の企画・運営に参画する機会は限られていますね。

**稲葉** 日本遺産を見ていて感じるのは、文化財側は観光への理解がなく、その逆も同様です。互いの認識が共有されていない。金科玉条のごとく「文化財は大事」と言うだけでは何も変わりません。（文化財を守り、伝えるためには）もっと柔軟な思考が大切です。「文化財」という言葉を変えた方が良いのではないかとすら思うのですけれど。



新潟県世界遺産室  
滝沢 規朗

## これからの期待と課題

**司会** ではここで、若い世代を代表して佐渡市の北見さんに登場いただきましょう。北見さんは世界遺産に携わって何年になりますか？また、世界遺産登録後の現状をみて何を感じますか。  
**北見** 5年目になります。佐渡市に入庁した翌年に県へ4年間の派遣となり、県の皆さんと世界遺産登録の仕事に従事しました。今年の4月から佐渡市職員に復帰しました。感じているのはガイド不足の問題です。世界遺産としての価値を理解するには、実際に現地を訪問して、採掘場に落ちている鉱石を触ったり、大量に水を流した導水路の跡を歩いたりしながら、当時の人々の営みや金銀採掘技術を実感してもらうことが一番です。しかし、年々現役世代のガイドが少なくなってきており、これからガイドをしたいと思う人が出てきても、学ぶ機会すら限られるようになってきています。どうしたら現役ガイドの知見を継承していけるのか、喫緊の課題だと思います。

**宇佐美** 例えば構成資産のひとつである佐渡奉行所跡では、江戸時代の復元建物はあるものの、そこでどのような役目の人たちが、どんな仕事、日常生活を送っていたのか上手く説明できていない状況にあります。ガイド養成講座を開講する取組も始めていますが、少子高齢化・人口減少は待ったなしで進んでおり、デジタル技術を活用したAR画像や音声ガイドシステムの活用も検討したいと考えています。行政だけでは限界があるので、民間の知恵もお借りしたいところです。



新潟県世界遺産室  
渡邊 裕之

佐渡島の金山保存活用推進  
ネットワーク会員  
(サポーター) 募集中！  
世界遺産「佐渡島の金山」を  
応援してください！  
【会費無料】

▼お申込みはこちらから



**司会** 佐渡は海を隔てた島ということもあり、陸続きの世界遺産にはない制約や課題があります。しかし、だからこそ豊かな自然のなかで、有形・無形の文化資産が良好に残ってきたとも言えるのではないのでしょうか。佐渡は昔から「日本の縮図」と言われますが、世界的な課題とも言える少子高齢化社会のなかで、持続可能な社会のモデルとなれるような取組を、世界遺産登録を契機に様々な立場のみなさんと考えていけたらと願っています。お集まりの皆さん、本日はどうもありがとうございました。



令和8年3月31日発行  
新潟県観光文化スポーツ部文化課世界遺産室  
新潟県新潟市中央区新光町4番地1  
TEL：025-280-5726